おとうと

Ｃ・Ａ

昭和５４年１０月２８日、当時４歳だった私は、憧れの「お姉ちゃん」になりました。「隆陸（たかみち）」と名付けられた私の弟は、何物にも代えがたい宝物のような笑顔を持ってこの世に産まれてきました。私は、隆陸のお姉ちゃんとしての私が大好きでした。

そんな私の「お姉ちゃん」としての役割は、それから２４年後の平成１５年１１月２３日に突然絶たれました。私たち家族の宝物だった隆陸は、飲酒運転の車にひき逃げされ、たった一人で誰にも別れを告げることなく旅立っていったのです。

遺された私たち家族の生活は一変しました。それまで「こんなに幸せな人生でいいのかな」と時折呟いていた母が、この事故を境に笑うことはなくなりました。最愛の息子をある日突然奪われた両親の苦しみは、想像を絶するほど深いもので、日常生活を送ることさえ不可能でした。母に至っては、自分の力で立つことも歩くこともままならない日々が続きました。

その中で、私と兄に会う方が「お父さんをお願いね。お母さんについていてあげてね。」という言葉をかけていきました。当時、その言葉に傷ついたというよりは、弟が亡くなった現実を受け入れる前に、非常に大きな得体のしれない何かを背負わされたような気がして、悲しむこともできず、非日常のあらゆる作業に追われていたような気がします。それと同時に、今すぐにでも消えてしまいそうな父と母の姿に、常に恐怖を感じていました。

弟のいのちが奪われたことによって、両親は私の想像をはるかに超える苦しみを抱えたのですが、今まで一緒に大きくなってきた弟を亡くした兄と私にも、弟を亡くした淋しさと悔しさがあります。だけど、誰もその悲しみに目を向けてはくれませんでした。私もこれ以上両親の悲しむ姿を見たくなく、自分の想いを口にすることはなくなっていきました。私の言葉でまた両親を傷つけてしまうことがすごく怖くて、両親や兄に弟の話をすることがなくなっていきました。また、こんな話は友人にできるわけもなく、一人で抱え込んでしまっていきました。

弟が亡くなった時、私はもう２７歳。子どもではありませんでした。しかし、昨日まで私のことを一生懸命考えてくれていた両親の心の中は、亡くなった弟一色で、弟のことしか見えてなく、兄や私の存在はすっかり消え去ってしまっていました。弟がいなくなって悲しくて淋しくて仕方がないのに、それを誰も聞いてはくれなかった。それどころか、あんなに幸せだった家族が、バラバラと音を立てながら崩れていきました。

あれから１２年が経とうとしています。時が経つがゆえの淋しさや苦しさとどう向き合っていいのかわからない。私は、もしかしたらあの時より今の方がずっと苦しいし淋しいのかもしれません。隆陸はどこへいったんだろう……。いつ会えるんだろう……。答えのない問いにずっと向かい合っているし、もしかしたら明日「姉ちゃん、しわが増えたなあ。」とあの天真爛漫な笑顔で隆陸が帰ってくるかもしれないと待ってしまうのです。

私は隆陸のお姉ちゃんの私に戻りたい。そう思って昨年の春から上智大

学のグリーフケア研究所で学んでいます。ここで、私は１２年抱えてきた私の想いを初めて言葉にしました。学びの途中ではあるけれど、この研究所で、私は「隆陸のお姉ちゃん」という役割を取り戻したような気がしています。弟を亡くした私にしかできないこと、隆陸のお姉ちゃんだからこそできることが私にはまだたくさんあるのかもしれない。『隆陸が生きたかった未来を隆陸のお姉ちゃんとして隆陸と一緒に歩く道を少しずつ見つけていきたい』とやっと思えるようになりました。

　ここ最近、支援の手が、少しずつではありますが、遺された兄弟姉妹に向き始めたことをとても嬉しく思っています。お兄ちゃん、お姉ちゃん、妹、そしておとうと、かけがえのない兄弟姉妹を亡くした子どもたちが、ちょっぴり心を休めて美味しい水が飲める水飲み場が一つでも多く作られることを願っています。

……１３回忌を前に。母のいのちが今も繋がれていることに感謝して……